令和３年度 フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流

田中　豊大・澤口　真弓・田万　幸子・久川　浩太郎

筑波大学附属聴覚特別支援学校では、平成 15 年にフランス国立パリ聾学校と姉妹校協定を締結して以来、オンラインや相互訪問などで交流を重ねてきた。しかし、昨今の新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、令和元年度以降対面での交流を行うことができず、オンラインによる交流のみを実施している。令和３年度も高等部普通科では、昨年度に引き続き、２回のオンライン交流を行った。オンライン交流の事前学習・実践・振り返り活動を通して、生徒の相手校や相手国に関する興味関心が高まったり、異文化コミュニケーションや外国語学習に対する意欲が向上したりすることが示され、国際交流におけるオンライン交流の重要性が示唆された。

キー・ワード：国際交流　オンライン交流　コミュニケーション　異文化体験　異文化理解

1　はじめに

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）とフランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校）との交流は、平成 15 年の姉妹校協定の締結から始まり、オンライン交流は平成 25 年度より行っている。平成 25 年度のオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、通学生はこの交流には参加できなかったため、平成 28 年度からは放課後の時間を利用してオンライン交流を行った。その結果、異文化理解やコミュニケーション能力の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆された。令和元年度は３回オンライン交流を実施し、その後パリ聾学校を訪問した。渡仏前にオンライン交流を行うことで、パリ聾学校の生徒とのコミュニケーションに慣れたり、訪問時に行うプレゼンテーションの工夫の参考になったりした（久川・澤口,2020）。

令和３年度は、11 月以降にオンライン交流を２回実施した。事前に希望者を募ったところ、23 名が参加を希望し、そのうち第１回の交流では 23 名全員が参加した。第２回は生徒によって他の行事との重なりが生じたため、19 名の参加となった。

フランスと日本の時差は８時間（冬時間）であるため、第１回、第２回ともに日本時間の 16:30（フランスは 8:30）から、１時間程度交流を行った。

2　オンライン交流の実践

令和３年度のオンライン交流は、オンライン会議アプリ Zoom（以下、Zoom）を使用して、２学期に２回（11 月 19 日、12 月 17 日）実施した。２回とも、昨年度と同様の時期である。

第１回の交流は、母語の異なるパリ聾学校の生徒と初めてコミュニケーションをとることを考慮し、３回の事前学習を実施した。第２回の交流では、第１回の交流で発表しなかったグループが、前回の反省をもとにプレゼンテーションを作成し直し、発表、交流を行った。

(1) 第１回オンライン交流事前学習

①　第１回打ち合わせ（11 月 10 日 12:50～13:15）

本年度は、参加希望者を募ったところ、高等部普通科１年生７名、２年生 14 名、３年生２名と人数が多かったため、一人一人が公平に交流に参加できることを考慮し、４つのワーキング・グループに分かれ、それぞれ異なるテーマで日本の紹介を行うこととした。３年生は令和元年 12 月にパリ聾学校の訪問交流に参加した生徒もいたため、アドバイスをしたり、交流が円滑に進むよう補助をしたりする立場として参加した。

４つのワーキング・グループとそれぞれの発表テーマは、参加者同士の話し合いによって決め、希望するテーマのグループを生徒が自ら選択した（Table 1）。

Table 1　発表テーマと構成メンバー

発表テーマ	１年生	２年生
「本校の文化祭」	０名	４名
「日本の文化」	３名	４名
「日本の映画・アニメ・音楽」	２名	４名
「日本の世界遺産」	２名	２名

事前に、タブレット端末で使用する学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」を用いてグループでスライド資料を作成することとした。これまでのオンライン交流での反省から、文字の色は白、スライドの背景は黒で統一し、見やすさに配慮するよう指導した。

②　第２回打ち合せ（11 月 5 日 12:50～13:15）

それぞれのグループの準備の進捗状況を確認した。また、交流に向けて、フランス手話の基本表現について学習した。学習にあたっては、動画共有サービス YouTube を用いて、基本的な自己紹介や挨拶表現の動画を視聴した。また、令和元年度にパリ聾学校への引率経験がある教員が手話表現を示し、生徒がこれに続けてフランス手話の練習を行った。フランス語やフランス手話の学習歴がない生徒がほとんどだったため、「Bonjour」や「Merci」などの基本的な表現を中心に行った。

③　第３回打ち合せ（11 月 18 日 12:50～13:15）

はじめに、事前に教員が機材をセッティングした様子を写真で記録し、当日の話者の立ち位置や機材の場所、使用方法等を確認した。

次に、令和元年度にパリ聾学校を訪問した３年生の生徒が、１年生・２年生の参加者に向けて、実際の会話で頻用するフランス語と手話表現をプレゼンした。第２回打ち合せで学習した基本的な挨拶表現に加え、「comment（どのように）」「qui（誰）」などの疑問詞を学習した。３年生の手話に続けて、手話表現を練習した。実際にフランスを訪問した際に、どのような場面で使ったか、自らの体験談を踏まえた説明に、積極的な態度で参加する様子が見られた（Fig. 1）。

Fig. 1　３年生の生徒によるフランス手話の説明

(2) 第１回オンライン交流実践（11 月 19 日）

①　機材や教室内配置

オンライン交流は、参加者全員が集まれる多目的スペースで、常設されている大型のスクリーンとプロジェクターを使用して行った。通信機器については、本校のコンピュータとパリ聾学校のタブレット端末をインターネットに接続して、Zoom のミーティング機能を使用した。本校のコンピュータは２台を同じミーティングルームに接続した。１台は生徒が発表時に操作するために、もう１台は本校とパリ聾学校の教員同士がチャット機能を使用することにより、必要な連絡を交わしたり、生徒に向けて文字による情報保障をしたりするためである（Fig. 2）。スクリーンには、①パリ聾学校の生徒の様子、②本校の話者の様子、③スライド資料、④教員のチャットを一度に確認できるように画面を分割して投影した。本校の撮影に当たっては、オーリングライトが一体化した Web カメラを使用し、生徒の表情や紙に書いた文字が相手に見やすいように配慮した。また、生徒が作成したスライド資料は、生徒操作用のコンピュータに事前に PDF ファイルとして保存しておき、Zoom の画面共有機能を使って、画面上に映し出した。

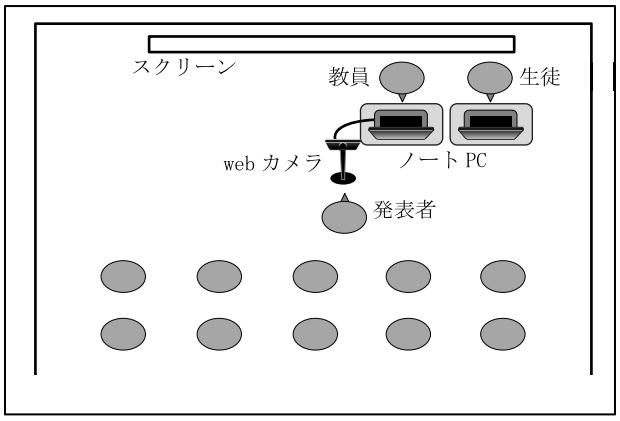

Fig. 2　教室内の配置

② 交流の内容

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本校教員、生徒は常時フェイスシールドを着用して行った。

第１回の交流では、はじめにアイスブレイクとしてお互いの国での挨拶や基本的な表現を教え合う活動を行った。文字で「Merci」「こんにちは」などと示した後で、生徒が手話表現で示し合った。パリ聾学校の生徒は小型のホワイトボードで書いて示し、本校は教員が Zoom のチャット機能を使って生徒に内容を示した。最初は、不慣れな様子だったが、相手に正しく手話表現が伝わった時に、笑顔で「Oui」とあいづちを打てるようになり、緊張感をほぐすことができた。

次に、本校の生徒３グループが発表を行った。本校生徒が英語で作成したスライド資料のデータを、事前にパリ聾学校の教員宛てにメールで送付し、生徒に読んでもらい、その内容についての質問を考えて返信してもらっていた。これにより、交流当日は、パリ聾学校の生徒が、文字を読むことばかりに集中する負担を軽減することができたことに加え、質問への返答を中心に行うことで、より内容の深いやりとりに繋げることができた。

最初のグループは、「本校の文化祭」について発表した。本校生徒が本校のゆるキャラの着ぐるみで登場して紹介する場面があった。パリ聾学校の生徒からは、英語で「ゆるキャラがどうして紫色なのか。何のために作ったのか。」という質問があり、本校の生徒が「紫色は学校のテーマカラーだから。学校特有のキャラクターを作りたかったから。」と英文を紙に書いて答える様子などが見られた。質問を提示し、紙面を裏返して回答を見せるなど、生徒の伝え方に工夫が見られた。

続いて、「日本の世界遺産」について発表を行った。発表後に「日本の最も寒い場所の気温と最も暑い場所の気温」を尋ねられ、本校生徒が事前に書いて準備した回答を見せると、パリ聾学校の生徒は驚いた表情で反応していた。

最後に、「日本の映画・アニメ・音楽」の発表では、「おすすめのアニメは何か」という質問に対して本校生徒が回答したところ、パリ聾学校の生徒の一人が「その作品を見たことがある」と発言し、お互いの好みを共有する場面が見られた。

第１回の交流では、一人一人がカメラの前に立ち、交流する機会を設定することができた。一方で、発表していないグループの待ち時間が長くなったことが反省に挙げられる。また、事後に参加者へ実施したアンケートで、「カメラをスクリーン前に設置することで、話者にとっては話しやすい位置だったが、発表していない生徒にとっては、話者とスクリーンが一直線上に重なり、どんなやりとりが行われているのか情報を得られなかった。」という意見が見受けられた（Fig. 3）。

Fig. 3　第１回交流の様子（話者の立ち位置）

(3) 第２回オンライン交流事前学習
（12 月 9 日 12:50～13:15）

第２回の交流に向けての事前学習では、令和元年度にパリ聾学校を訪問した３年生の生徒から、

パリ聾学校の学校紹介と体験談の発表を行った。現地での写真を多く取り入れたプレゼンテーションを投影し、一枚一枚の写真について解説を聞いた。本校にはない「ホール」と呼ばれる集会スペースや、日本と異なる給食の写真を注視する様子が見られた。発表の最後には、発表者一人一人から「最初は自分がフランスに行ってやっていけるかという不安があったが、実際に行くととても楽しかった」、「コロナが終息したらぜひパリ聾学校に行ってほしい」などと激励の言葉を受け、オンラインだけでなく対面での交流に対して、意欲を高めることが、生徒の主体的なやりとりの中でなされた。また、他の行事との兼ね合いにより、第２回オンライン交流に参加できない生徒にとっても、フランスやパリ聾学校について知見を広げ、関心を深めるよい機会となった（Fig. 4）。

Fig. 4　体験談発表の様子

(4) 第２回オンライン交流（12 月 17 日）

①　機材や教室内配置

第１回と同様の機材を用いたが、反省を受け配置の変更を行った。第２回では、発表者以外の生徒が、スクリーンの情報をより多く確実に受けられるように、オーリングライトとカメラの位置を教室の端に設置した。これにより、相手に伝わる目線はやや不自然になったが、参加者が大人数の場合に全員にとって見やすい配置へと改善された（Fig. 5）。

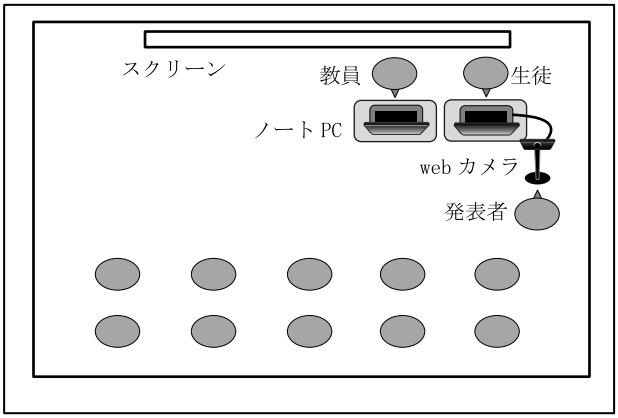

Fig. 5　教室内の配置

②　交流の内容

16:30（フランスは8:30）の交流開始に先立ち、16:00からパリ聾学校から事前に送付された学校紹介動画を視聴した。動画は５分程度のもので、リレー大会やダンスパーティ（プロム）など学校行事が紹介された。事前学習で３年生が紹介した写真と同様の施設を動画で改めて見ることができ、パリ聾学校の施設や学校生活の様子がイメージしやすくなる有意義な内容だった。

第２回の交流では、はじめにパリ聾学校の学校紹介動画を視聴した。事前に視聴した内容に加えて、最寄り駅から学校までの登校風景が撮影されており、学校周辺の街並みを知ることができ、生徒は興味をもって視聴した。

続けて、本校生徒１グループが発表を行った。「日本の文化」をテーマに、「桃太郎」などの昔話の紹介と、「５分前行動」に代表される日本人の時間に対する考え方の特徴に焦点化して発表を行った。発表終了後には、英語で質問を考え、筆談で会話をした。パリ聾学校の生徒は小型のホワイトボード、本校生徒はＡ３サイズの白紙に書き、カメラで映し合うことによって意思疎通をした。本校生徒が「５分遅刻することをどう感じるか」と質問したのに対し、パリ聾学校の生徒が「５分は何とも思わない。電車だって遅れるから」という旨の回答をするなど、お互いの時間に対する意識の違いを英語で楽しみながら共有することができた（Fig. 6）。

最後に時間に余裕があったため、お互いの国の手話表現について質問し合う時間とした。日本の

「元気」という手話表現が、フランスでは「All right」の意味で使われることを知るなど、グループ発表と比べて形式ばらないやりとりの中においても、生徒の気付きや学びの様子が見られた。

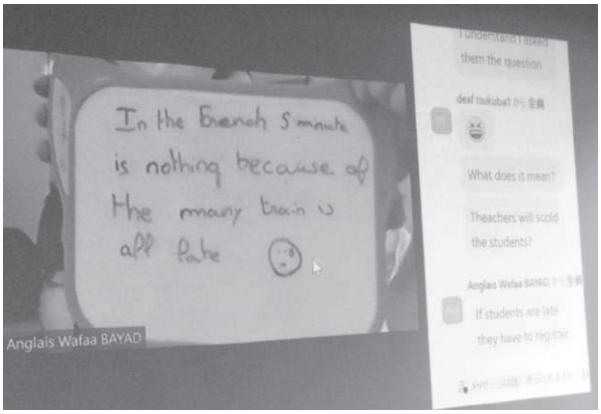

Fig. 6 パリ聾学校の生徒の筆談

3　調査結果

オンライン交流実施後、Microsoft Forms を使用した選択式の電子アンケート調査を参加者に実施した。質問は 10 項目で、それぞれの質問項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの五件法で回答を求めた。各質問項目の回答を、「とてもそう思う＝５点」、「そう思う＝４点」、「どちらでもない＝３点」、「そう思わない＝２点」、「全くそう思わない＝１点」として、２回の交流の平均を集計した（Table 2）。

Table 2　電子アンケート調査結果

質問項目	平均
①発表では交流相手にわかるように工夫した。	4.1
②準備や練習の時間がもっとほしかった。	3.5
③交流時間（約１時間）は短かった。	4.4
④今回の交流を通して、英語に興味をもった。	4.3
⑤今回の交流を通して、英語をもっと学習したいと思った。	4.3
⑥今回の交流を通して、フランスの手話に興味をもった。	4.0
⑦今回の交流を通して、フランスや交流相手に興味をもった。	4.5
⑧今後も国際交流に取り組んでみたい。	4.8
⑨オンライン交流ではなく、実際に現地に行きたいと感じた。	4.9
⑩今回の交流は、社会人になったときに役に立つと思う。	4.7

選択式の調査の結果、国際交流に対して積極的な回答が多かったことに加え、実際に現地に行きたいと回答する生徒が非常に多かった。今後も、定期的な交流の機会が望まれるが、オンラインという方法だけではなく、現地を訪れ対面による従来的な交流を強く望む声が多いことが分かった。英語に関する項目⑤では、「今回の交流を通して、英語をもっと学習したい」という問いに、「とてもそう思う」または「そう思う」と答える生徒が、第１回から第２回にかけて増え、英語に対する興味関心の向上が見られた。また、スライド資料の作成やパリ聾学校の生徒からの質問の回答においても英語を用いており、オンライン交流の内容によって、英語の学習意欲が向上することが示唆された。本オンライン交流が、英語の学習に対しても一定の効果があると考られる。本調査結果を今後の指導に生かしたい。

電子アンケート調査では、選択式の質問の他に、５つの項目について自由記述の調査も行った。質問項目と回答は、以下の通りである。

①　オンライン交流で印象に残ったこと

「フランス手話を用いて意思疎通を図れたこと」「Yes／No で答えるだけの簡単なやりとりが多かったが、伝わってるんだと言うことが実感できて嬉しかった」「住んでいるところが違っても、コミュニケーションをとることができるのだなと改めて感じた」「発表の時に質問してくれて嬉しかった」など、相手と意思を伝え合うことができたことの喜びについて回答する生徒が多かった。

②　オンライン交流でうまくいったこと

「事前に資料を送っていたため、進行がスムーズになり、より多く交流ができた」など限りある交流の時間を事前の準備によって効率的に使うことができたという意見や、「発表する時にフランス手話で理解しているかどうか確認しながら進行できた」「スライドを流すだけでなく、アニメや映画紹介の際にジェスチャーで表現できた」など、伝え方を工夫したことによって相手が理解の深まったと実感する記述が見られた。

③　オンライン交流でうまくいかなかったこと

前述の通り、第１回の実施後の調査では、機材の配置や参加者の人数の多さの面から、「他のグループの発表がどんな内容か理解できなかった」という意見が散見された。パリ聾学校の６名の生徒に対して、本校の参加者が 20 名を超えており、一人一人に発言の機会を設け、さらにその内容や情報を同時に全員が理解することには厳しさがあった。より深く交流を深めるためには、人数のバランスを考えていくことが課題の一つである。他にも、「自分から積極的に話して交流できなかった」という内省的な記述も多く見られた。

④　機材や設備の面で気付いたこと

「筆談で伝える際に、Ａ３の紙ではなく、パリ聾学校の生徒が使っていたような小型のホワイトボードがあると良い」という意見が複数見られた。以前のオンライン交流で、ホワイトボードの使用を試みたが、光沢面の照り返しにより見えづらくなってしまった反省から、紙を使うようにした。今後、反射が抑えられる素材でオンライン交流に適した小型のホワイトボードがあれば、積極的に試したい。

⑤　次回のオンライン交流で取り組みたいこと

それぞれの国の伝統的なゲームや昔遊び、ジェスチャーゲーム、劇など、オンラインで楽しめるゲーム型の交流を望む記述が多かったが、中には、学校紹介やグループディスカッション、サインネームの紹介など少人数でより深い内容のやりとりを望む意見も見られた。

4　まとめと今後の展望

オンライン交流の様子やアンケート調査の結果から、異文化交流や国際交流への意識の高まりや、英語学習に対する意欲の向上が示唆され、オンライン交流が有意義であることが確認された。一方で、オンラインのみならず、直接会って交流したいという気持ちが強まっていることも確認することができた。しかし、現在の高等部普通科の生徒で実際にパリ聾学校を訪問した経験があるのは、３年生のみである。上級生から下級生に対面での交流の魅力を伝承できる機会には限りがある。本年度のパリ聾学校とのオンライン交流は、ただ相手校の生徒とコミュニケーションをとるだけでなく、その準備段階において学年をまたいで交わした生徒同士のやりとりが有意義な学びになっていた。

今後も、パリ聾学校の生徒と本校生徒が主体的に対話できる交流を実施していきたい。

〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

〔参考文献〕

澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎（2021）令和２年度フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流. 筑波大学附属聴覚特別支援学校研究紀要, 43, 62-66.

久川浩太郎・澤口真弓（2020）令和元年度フランス国立パリ聾学校（INJS）とのオンライン交流. 筑波大学附属聴覚特別支援学校研究紀要, 42, 81-85.